
マケン姫っ! ~無限を手に入れし者~

津禍霧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マケン姫っ！ ～無限を手に入れし者～

【Nコード】

N7501T

【作者名】

津禍霧

【あらすじ】

目が覚めるとそこには何もない空間が広がっていた。突如死んでしまった少年は神様を名乗る怪しい女性の失敗によって死に、そして転生させられた！？ 少年の運命は神の失敗だけが知っている…… 基本は原作に沿って進めて行きますが、オリジナルのストーリーも入れていきます。主人公は不幸で最強です（笑） さらに更新は一週間に一回が限度と言う亀更新です。主人公最強が無理な方や更新速度が遅えと思った方は戻るやクリアキーをワンプッシュしてください。

プロローグ（前書き）

処女作です。

一言でいうと駄文注意です（笑）。

これは無理と思われた方は、無理をせず戻るやクリアキーをプッシュしてください。

それではどうぞ。

プロローグ

目が覚めるとそこには何もない空間が広がっていた。

いや、『何もない空間』と言うには異彩を放つ『モノ』がそこにはあった。椅子とテーブル、それに人。今自分がいる場所からは後ろ姿しか見えないが、綺麗な銀髪を腰の辺りまで伸ばし、体の線が少しばかり細いことから恐らく女性であると思われる。

だが彼女からは（中二臭いかもしれんが）人とは違う臭いがした。いや、している。ただ眺めているだけなのだが、彼女が怖い。否、本能的に彼女が危険であると、自分より位が高い『生き物』だと分かっているから見ているだけで『怖い』という感情が出てくるのである。

ならすることは一つ。迅速にそれでいて静かに、気配を消して後ろにさがるだ「何をしてますの？」けではすみそうにはないな、こりゃ……

その後なんやかんやあったが（無視して後ろに下がったり、聞こえない振りをして後ずさったりなど）ついに彼女に従い（首根っこを掴まれながら引きずられ）、彼女の座る椅子の反対側に座っている。

しかし、あの細い体のどこにあんな馬鹿力があ「何か言いましたか？……今、心を読みましたわ」……えっ？

「何を驚いているか存じませんが、私は貴方方人間がいう『神』と

呼ばれる存在でしてよ。これぐらいのこと出来て当たり前ですわ。」

「……思考が追いつけないんだが？」

「あら、なんて回転の悪い頭なのかしら。」

「煩い黙れ、そう思うなら俺の頭をもっと良くしてくれよ。てか、いきなり『自分は神ですよ』とか言う奴に『そうなんですか』とか返せるかよ！」

「よろしくてよ。なら、それが第一の願いということでもよろしくて？それと、随分硬い頭でして。」

「なんだとこのやろ……う？」

そう思いながら神（仮）の方を見ると顎に手を添え、その顔には不適な笑みを浮かべていた。

「それでは、第一の願いは頭を良くするっと。」

「一寸と待て。いや、待つてください、神様。」

「なんですの？私は貴方と違って暇ではありませんの。これでも多忙の神でして。」 困惑する頭をフル回転させながら俺は神（仮）に疑問を投げ掛けた。

「いや、さっきから言ってる第一の願いってなんぞ？」

「読んで字のごとくでしてよ。あと、願いは二つありましてよ。」

「……いや、待て。いきなり願い事を三つ叶えてあげると言われても意味がわからんのだが？」

そう、意味が分らない。死んだ（と思われる）俺の願いを聞いて何のメリットがあると言うのでだろう？

そんなことを疑問に思っていると神（仮）は呆れ果てた顔をしながら口を開いた。

「はあ、仕方ありませんわねえ。簡単に説明しますと、私の失敗で貴方は死んでしまい、それを帳消しにするために貴方を転生させる、優しい私はそんな貴方の三つの願いを聞いて差し上げようとしている、とこんな感じでしてよ。」

説明を聞き終えた俺は神（仮）に向かって大きなため息をつきながら言っていた。

「……悪いのあんたじゃねえか、神様。」

「な、何を馬鹿げたことを仰いますの！？」

「いや、あんたが自分で言っただろ？『私の失敗で』って。」

頬杖をつきながら呆れた顔でそう言った。ああ、またため息が。

「はっ！？またやってしまいましたわ！？」

……あんた実は馬鹿だろ？

てか、今『また』って言わなかったか？『また』って。

「そんなことはありません！それと、『また』なんて言ってませんわ

「！」

喋るのにも疲れはて心の中だけで呟いていると、その呟きに反応した神（仮）がテーブルをバンバン叩いている。と言いか止めてくれ。さつきからもの凄く揺れてるから。

「大体貴方は何様のつもり何ですか！（バンバン）私は神でしてよ！（バンバン）その神を前にしてその気だるそうな態度はなんですか！（バンバンカチッ）大体ですね、神は敬うべき……カチッ？」

突然神（仮）が動きを止めたと思ったら段々と顔が青ざめていき、何か大変なことをしてかしたのではないかと思ひ声をかけようとしたその瞬間。

「へっ？」

俺が座っていた椅子の下に黒い穴が現れ、重力（そんなものがあるのか分らないが）に従い俺は落下していった。

プロローグ（後書き）

こんにちは、こんばんわ、そして初めまして作者の津禍霧です。
どうでしたか？

神様があなつたのは夜中の変なテンションのせいですよ、ええ。

さて、原作に入るまで作者は最低あと二話ほどかけるつもりですが、大丈夫ですかね？（何とかしますがね）

そんなこんなで、また次回ということで。 ノシ

第1話 く知らない世界で再出発（リスタート）く（前書き）

お待ちになられた皆さま、そうでない皆さま、お待たせしましたついに次話投稿です。

何かを語るのは後書きということぞ、本編をどうぞ。

第1話　く知らない世界で再出発（リスタート）く

目が覚めると朝の爽やかな風が俺の男にしては長い髪を撫でていく。風の中には朝食の香りが混じっており、程よく目覚めた頭に空腹感を訴えさせる。

だが、現実とは非常なもので壁掛けタイプの『電波時計』を見た瞬間、気持ちの良かった風は肌寒くなり、程よく感じていた空腹感とはなくなってしまった。

そう、これがただの壁掛け時計ならこんな事にはならなかったんだと思う。いや、軽くはなっていたかも知れないが現実は変わらない。

俺が見ている時計は『電波時計』であるという現実リアルは変わらないようだ。

つまり、なんというか……余りにもテンプレ過ぎるから言いたくはないんだが……言うしかないのだろう……

「ち、遅刻だー!!」

神（仮）からボツシュートを受けたあと、俺は普通に新たな人生を歩み始めた。

急に言われても意味がわからない？……簡単に言うのだ、『転生』して『赤ちゃん』になって人生という名の長い道のりを再出発リスタートし始

めたのである。まあ、どんな気分かと聞かれたらたった一言『死にたい、殺してくれ』とだけ言っておこう。

さて、それから数年（深いところは聞かないで）は暇ではないが、何かが抜けたような生活を送っていた。

そう、前世でヲタク的な趣味を持っていた俺には幼児がする遊びなど楽しめるはずもなく、しかし独り遊びをするほど俺の精神は図太くはなく、……つまり何が言いたいかというとだ、『時間を無駄にしているだけ』という感じがしてならなかった。

しかも、神（仮）はいきなりボツシユートしやがったせいで、何の世界のどんな時期ですら分らないという状態だ。これでは身動き一つ取れない。

神からの連絡が入ったのは、そんなことを密かに思い始めたころだった。

『連絡』と言っても夢の中で対話した訳でも、突如見知らぬ住所から手紙が届いた訳でもなく、普通に電話をしてきたのである。しかも、両親が共に居ない日に。

電話の内容は長くなるので割愛するが、要約すると、『数日後また連絡をしますから、その時までお願い事を決めておいてください。今回の失敗の分もあわせて五つの願いまで構いません。』とこんな感じのことを小一時間話、いや正確には十分程話した後、神（仮）の仕事の愚痴を聞かされた。

この時の俺は、『数日後までに願いを五つ考えなくては』と思っていた。後、愚痴は二度とごめんだ、と強く思った。

しかし、待てど暮らせど神（仮）からの連絡は一切なく、現在の中学三年の今現在になってもその前触れすらないままである。

と、まあ今までの回想をしながら俺は朝食をとらずに家を出て、今は学校に向かって全力全開のダッシュ行っている。

このままのスピードを維持出来れば間違いなく、学校は余裕とまで行かないが間に合うであろう。

いや、悪いこれは嘘だ。正確には『二時間目には間に合う』、だそれにしても、とふと走るペースを落とさないよう気をつけながら考える。

あの神は確かにドジることが多い印象をたったの数秒で得たが、（勝手なイメージかもしれんが）時間や約束はしっかり守るタイプに思えた。

そんなヤツが約束を破ったりするだろうか？

それとも、俺との約束より大事なようが出来てしまったのだろうか。

そんなことを考えながらも俺の足は進み、遂に校門を視界の中に映すことが出来たその時、ポケットに入れてある携帯が震え出した。中学生になって直ぐに買ってもらった携帯は二年と少しの月日が流れ、そろそろ機種変も辞さない状態ではあるが、まあまだ大丈夫だろう。

とりあえず誰からの連絡かを確認して、それから校門をくぐっても大丈夫（諦めが肝心）であろう。

そう思い、携帯を取りだし、確認するためディスプレイを見た瞬間だった。

『あら、随分電話に出るのに時間が掛かりましたわね？』

「はあ？」

一寸待て。いや、諺で『噂をすればなんとやら』と言ったりするが、これは可笑しい。

あの数年間連絡を寄越さなかった神（仮）が連絡を寄越した？通話ボタンも押さずにいきなり通話開始？いや、通話はどうでも良くないけど今は良い。

『私は確かに、数日後また連絡を寄越すつと言った筈ですわよ？』

ん？今この神（仮）はなんと言った？『数日後また連絡を寄越す』？

「はあ？何言つてんだよ、神様。こっちでは数年たってるぜ？」

『何を仰いますの！？確かに私は数日たってから連絡させていただきましたわ！』

……成る程またいつもの『アレ』か。ああ、つまりはそういう事か。

だが、神（仮）にも誇り（プライド）ってもんがあるはずだ。全て神（仮）が悪い訳じゃない（悪いと思うが）。

中学生という半分大人になった俺ならきつと許せるはずだ。だが、俺はあえてその誇り（プライド）を砕いてやるう。

「なあ、神様。」

『なんですの？まさか、まだ願いが決まっていなと仰るつもりですか？』

「いや、そんなことはない。一応は決まっている。でもな、それより大切なことがあるんだ。」

『なんですよ、五つの願いよりも大切なこととは？』

そこで俺は少し息を吸う。大切なことだ、神（仮）に聞き間違えないようにしないと。

そしてゆっくりと息を吐き、神（仮）に語りかける。

「そっちでは数日かも知れんが、こっちでは数年たったんだぜ、駄女神様。」

俺と神（仮）、改め駄女神との間に静かに沈黙という見えない壁が出来た。

まあ、なんとなくそんな気がしていたから別段咎めたりしないが、駄女神のフリーズがとけるのを待つとしますかね。と思いながらふと思い出した。

「そう言えば、ここって何処の世界なんだ？教えてもらってないんだが。」

『えっ。』

こうして、駄女神のフリーズ時間は延びていったのである。……
てか、本当に何処なんだよこの世界。

第1話　く知らない世界で再出発（リスタート）く（後書き）

さて、本編第1話（プロローグを合わせて2話目）を読んでもう一度さつた皆さま、ありがとうございます。

作者的には「あれ、どうしてこうなった？」や「急展開すぎやしないか？」という感じがしましたが、読者の皆さまはどうでしたか？
予定と違いまだ原作に入れないような感じの終わらしかた&次話に続けにくい終わらしかたという……。

本当、どうしょ。

それでは、また次週をお楽しみにして下さい。

第2話 く天を契んだ日……かな? (前書き)

どうも一週間ぶりです。

楽しみに去れていた方お待たせしました、そしてそうでなかった方
暇潰しにどうぞ。

それでは、楽しんでいてください。

第2話　く天を契んだ日……かな？

「東南中出身、東雲^{しのめ} 桜花^{おうか}。ただの人間には興味はねえ、この中にヲタク、厨二患者、変態がいるなら、俺のところに来い！」

そう言っただけ俺は辺りを見渡した。

ふむ、出だしはこれでよし、だな。などと思いながらも一度息を吸い、「以上！」とだけ言い自己紹介を締め括った。

そうこれはあの日、駄女神からの電話があつてからほぼ一年たった、『とある』高校に入学した時の俺の自己紹介だ。

はつきり言うとなので空気は死んでしまった。何故だ？別に滑った訳でもないのに、全く検討がつかない。……まさか、皆このネタを知らないというのだろうか。

まあ、今はそんな些細なことはどうでも良い。

周囲から生暖かい視線を感じながら、俺はふとあの日の出来事を思い出しながら、右のポケットを軽く叩いた。

駄女神から電話があつたあの日、俺の人生は七割決まってしまう、残り三割は不安定なものになった。

……というよりも、神（駄女神にあらず）によってある程度その人生は俺が転生したその日から決まっていたらしいが、今はそんな事はどうでも良い。

とにかく、駄女神が再起動^{ふっかつ}した後の俺たちの会話内容は割愛して、

重要な部分だけを話そう。

重要な部分と言っても、内容は大きく別けて二つ。
一つ目は、今俺がいる『世界』について。まあ、悪い話ではなかった。

駄女神の話では、『何処の世界に落としたかも判らず、数日探す羽目になりましたわ。』と愚痴られた。

さて、そんな事はどうでも良いんだが、世界についての話の続きだが、結論から言うとこの世界は『マケン姫っ！』というマンガの世界だった。

これは俺にとって嬉しい誤算だった。『マケン姫っ！』は知らないマンガではなかった。

まあ、好きか嫌いかで聞かれれば嫌いな部類に入るマンガではあるが……

どうせ似たような内容にするなら他のマンガが良かったんだが、自分の知らない世界でないのでよしとする。

……はあ、ハーレムって嫌いなんだけどなあ。

それは置いといて、二つ目は一つ目と違い、誤算の塊みたいなものだった。

そう、駄女神が言っていた『五つの願い事』についてだったのだが、この時点ですでに誤算があった。

と言うのも、まず『神』が『願い事を叶える』と言われた場合、俺の偏見のせいかもしれないが『五つの願い事』が『絶対に叶う』と思ってしまっていた。相手はあの『駄女神』だというのに。

……何が言いたいかと言うと、『駄女神』が用意出来たうち『三つは必ず叶う願い事』で、残りの『二つは努力の末、実現する願い事』だった。

今さら嘆いても仕方なく、更に自分に憑いている神があの『駄女神』なら仕方ないと割りきり、『三つ』の願い事をしてその日は電話を切らしてもらった。

ついでに言うと、願い事は秘密だ。何故なら、その方がカッコイ

イから。

とまあ、そんな経緯（どんな経緯だよ）で俺は元名門女子学園にして、本年度より共学になったここ、『天日学園』に入学し冒頭の自己紹介をしたのであった。

因みに入学式は終わり、時間的には主人公が保健室にいる間に自己紹介などはすんでいった。

まあ、前途多難な学園生活になるんだろうが……

「ま、退屈凌ぎにはなりそうだな。」

そう言いながらもう一度右のポケットをさつきよりも少し強く叩いた。

第2話 〽天を契んだ日……かな?〽（後書き）

どうも皆さま。

今回の話はやつと天日に入学ですよ、はい。

本当は第1話で入学の予定だったんですけど、あれえ？

そんな事は置いといて、次話は遂に『ヤツ』が姿を表す……かもしれない。

更に主人公の初戦闘がある……かもしれない。

どっちも『かもしれない』が大切です。

……関係無い話ですが、主人公のプロフィールって要りますかね？
それではまた次回。

第三話　くさて、介入を始めますか（前書き）

どうも一週間お待たせしました。待つてない方も

さて、ついにヤツの正体が明らかに！？

それでは本編をどうぞ。

第三話　くさて、介入を始めますか

「一巻の物語？ふうん、そんなモノとうの昔に過ぎ去ってしまったわ！」

「くう！なんてことだ！」

「そうだ、その顔だ！クハハハ！さあ、物語は二巻から始まるぞ！」

『頑張つて！もう、独りの君！負けないで！』

「……ああ、そうだな。俺たちは負けられないぜ！行くぜ！相棒！」

『うん！もう、独りの君！』

そして、俺たち……いや、俺は最強を目指して歩み始めた

なんて夢を見た今日この頃。どうも、東雲　桜花だ。

さて、冒頭のあれは無視して唐突に現在の状況を説明。

今俺は天日学園の寮で起床したばかり、時間は午前四時。こんな時間^{マシ}に起きて同居人のことを考えろ、と言いたいがそんな心配は無^モ問題^{ミンタイ}。

何故なら俺は『独り部屋』（誤字にあらず）だからだ。

本来は何故かは知らんが、原作主人公『大山　武』と相部屋の予定だった。

しかしまあ案の定、武は四人部屋に逝ってしまったため、ここで一悶着。元『姫神 コダマ』の相部屋の奴に厄介になろうとしたところ、拒絶。……と言うか、取り合ってすらくれなかった。

さらに、他の部屋に空きはなく仕方なく『寮の横にプレハブを建て』、そこで俺『独り』で暮らしている。（プレハブが建つまでテナント暮らしを強いられたりもした。）

さて、俺の部屋割りも伝えた（誰得？）ところで、何故俺がこんなに朝早くに起きたのかと言うと、……テンプレ的なノリの秘密特訓だったりする。

秘密特訓をする理由は……深くは語らないが分かりやすく言うと『ヤツ』のせいである。

そんな訳で誰にも知られないよう、特訓を五時近くまでし、寮に^{プレハブ}戻り、朝食を取り、そしてギリギリまで二度寝をキメ、登校（たまに遅刻しかける）する。

そんな生活をほぼ一ヶ月続け、遂に五月に到達した！

……えっ？一巻って何？

「不審な暴力事件？」

そう言いながら、友人A（モブの名前など知らん）の方を向き、さも興味が無さそうな風を装う。内心では興味津々である。

「そつ。」

軽い返事と共に、自前のPCから顔を上げてこちらを見てくる友人A。微妙にイケメンなのがム力つく。

「僕も他人から聞いたただだから詳しくは知らないけど」

そう前置きをして友人Aは事件の内容をかいつまんで話してくれた。

曰く、立ち会い人がおらず決闘ではない。（天日学園では生徒間の揉め事は決闘で処理する。）

曰く、被害者の生徒は事件に関する記憶をなくしている。と不審な点が多すぎるため、『不審な暴力事件』となっているらしい。

まあ、そんな事を聞いた俺の感想は『成る程、二巻の始まりか』と思った程度だったりする。

……がしかし、これは良い機会であるかも知れない。ただでさえ、武とは違うクラス。話した事がない訳では無いが、部屋割り変更時に少し挨拶を交わした程度だ。

なら、どうすれば俺は主人公たちの枠に入る事が出来るか。

……答えは簡単だ。この事件を皮切りに俺もマケンキ（正式名、魔導検警機構）の一員になれば良いんだ。

そうと決まれば、今日の放課後は人気のない場所で張り込みをして……いや、でも……

「……はあ。ま、桜花なら大丈夫だと思うけど……お気をつけて。」

「おう、了解。」

そう応えながら、俺は頭の中であーでも無い、こーでも無いと張り込み作戦を考えながら右ポケットを叩いていた。

「と言うわけで、やっぱり体育館裏だったか。」

まあ、俺の推理どうりだったって訳……すいません、言い過ぎました。ただ原作を知っているから分かっただけです。

今はそんな事は置いて、俺は今日の前で起こっている事に目を向ける。

簡単に説明すると、二年生の網緒先輩が水屋みずやつるちと武を捕まえたところ……なんだが。

「あの余裕綽々の顔が、腹立つ。」

と小声で呟き、乱入しようとするが、作戦のため断念する。

作戦とは簡単なもので、ギリギリのところで参上、『やべえこいつカッコイイ』的な事を思わすのが、俺の考えた完璧（自称）作戦であ

「黙って見てな!!」

その声と共に何かを叩く音がすると同時に、俺の作戦は終わりを告げ、

「いや、楽しそうなことですな。俺も混ぜて下さいよ。」

そう言いながら俺は物陰から飛び出し、網緒先輩から武たちを守るように登場する。

「……アンタは？」

そう言いながら警戒心を剥き出しにしながら網緒先輩は問いかける。後ろにいる水屋も同じく。状況についていけない武は無視するとして。

「俺か？……俺は」

ゆつくりと余裕を持って右手をそのままポケットに入れ、『ヤツ』を掴んで取りだしながら、

「一年、東雲 桜花！そして我がマケン」

「カレイド魔権”ルビー”！」

突き出した右手には、魔法少女たちが握っていきそうなファンシーな杖が握られてられていて、

『さあさあ、私ことミラクルマジカルステッキ”カレイド ルビー”と、マスターである桜花さんが揃えば、皆さん揃ってデストロイするなよ』……もう、分かっていますよ桜花さん。』

そのファンシーな見た目からは想像出来ない威圧感を放っている。そして喋っている。

それは仕方ないことだろう。なんたってルビーは現段階では最強のマケンになるであろうマケンだ。そんなマケンから威圧感が放たれない訳がないだろう。

「さて、あんたらの鬭いに乱入するつもりはなかったんだが……」

『女性の顔を叩くのは頂けませんね』

啞然としながら俺を いや、俺たちを見ている三人を無視して、

「だから、」

「『こつから先はお仕置きタイムだ（ですよ）』」

そう言い放って、ルビーを持つ右手に力を込める。

「さあ、ショータイムだ。」

第三話　　ゝさて、介入を始めますかゝ（後書き）

ヤツの正体はルビーだった！

とまあ皆様分かりやすかったですよゝ
ついにルビーの参戦。

これで桜花の敗けはほぼなくなりました。（笑）

……戦闘まで行けなかったのが悔しいですが、ね。

さて、それではまた次回をお楽しみに。

第4話 〈初戦闘?〉（前書き）

長らく更新をストップさせてしまって、すみませんでした？

リアルの用事で書けなかった次第ですが、これからは以前と同じく週1のペースで書いていきますので、どうぞよろしくお願いします？

第4話 〈初戦闘?〉

戦闘なう。 どうも東雲 桜花だ。

冒頭に書いたとおり只今、絶賛戦闘中だ。 ならなんでそんなに余裕があるんだ?と聞かれると、早い話が『ちょ、それで全力とかマジワロスw』てな状況だからだ。

考えてもみて欲しい。ただでさえチート武器の“ルビー”。 ここまでなら良かったものの、相手のマケンの能力は『行動制限及び拘束』と言う感じだ。

さて、ここまで言えば分かると思うが、俺と網緒先輩の相性（マケンの能力的意味）は最悪なのである。

例えば、網緒先輩のマケンで俺が動けないとしても、俺は固定砲台として魔力弾や魔力砲を撃てば良い。

よってこれだけの余裕が生まれた訳だ。

まあ、流石は二年生と言う事もあり、網緒先輩は直撃せずに回避し続けていたりする。 それには素直に驚いた。モブキャラの底時から垣間見たぜ、的な。

そんな訳で俺は魔力を、^{エレメント}網緒先輩は体力を消耗していつているという構図になった。

- -とはたから見ると思ってたかも知れないが、戦闘中の俺には- -いや、俺たち（俺とルビー）にはそうは感じられなかった。

そう、俺の相棒“ルビー”の能力はチートの一言につきる。 神様曰く、『原作での“ルビー”の能力がそのまま再現されていますわ。』とのことだ。 つまりはこの魔権^{カレイド}“ルビー”にとって『魔力の消費』と言う事など何と言う事のない些細な事なわけで、

「ギアを上げるぜえ!!! ルビー!!!」

『ああ、そんな... まだ激しくなるなんて... ダメ!!! 桜花さん

！！　こんな、こんな人前で「黙れよ、馬鹿ルビーｗｗｗ」もうノリが悪いですよー、桜花さん」

こんな馬鹿みたいなコントをしながらでも、今までよりも一回りは大きな魔力砲エレメントを放った。

……　そう、放ってしまったのだ。

- -　もし、もう少し俺が冷静な判断を下せていたら……　あんな悲劇は起こらなかった筈だったのに……　- -

そう、俺が放った魔力砲エレメントは網緒先輩の網緒先輩による網緒先輩がなし得た最善の行動 - - 俗に言う回避によって、網緒先輩の後ろにあった『体育館の壁』に着弾し、あろう事か壁を『爆散させてしまった』のだ……

『あ、すいません。　ギアを一段どころか三段ぐらい上げちゃいました。　w　ごめんなさい、桜花さんw』

そうルビーが謝罪するのと、

「みんな、大丈夫!？」

天谷春恋シロキが到着するのと、

「やり過ぎだあ!!!　馬鹿ルビー!!!」

俺が叫び声をあげるのはほぼ同時だった。

……　マケンキ入りは無理ぽな気がするなあ……　……　はあ……　- -

- - 「あはは、わけわかんないよお。」

そう言つて笑う少女は先程、一方的な暴力を行つた少年 - 東雲
桜花が連れていかれる様を眺めていた。

「あれだけ強いんだつたら、ちょっとは抵抗したらいいのに……」

表情は膨れっ面に変わつてはいたが、また表情を笑顔に変えると、

「待つててね、桜花^{だいき}君。絶対、ぜえええったい助け出してあげる
からねえ。」

虚ろな目は何も語らず、その瞳にあるのは只々少年^{おつか}の事だけだった。

「こんな馬鹿みたいな世界からあ。」

物語は動き出す。

終わりは見えず、深い闇へと進んで行く。 - -

第4話 〈初戦闘?〉（後書き）

短い…ですね。

つ、次からは3、4ページぐらいにはなるんで許して下さい？

それと、スマホに代わったせいで仕様が少し変わっています。
読みにくいかもしれませんが、お許し下さい。

それでは、また次回？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7501t/>

マケン姫っ! ~ 無限を手に入れし者 ~

2011年12月25日23時02分発行